

東数協ニュース（2018年9月）の数学教育思い出ポロツと！（3）小沢 健一
の中で、福沢諭吉の言葉として

「教育の文字ははなはだ穏当ならず、よろしくこれを発育と称すべきなり」
があり、小沢さんは結局これに納得した、と書いています。

福沢諭吉 文明教育論（時事新報、1889年（明治22年、教育勅語発布の前年））
はネットで読めるので一部分を書き写します。。書き出しは

「今日の文明は智慧の文明にて、智慧あらざれば何事もなすべからず（することができない）、
智慧あらば何事もなすべし（することができる）」（ ）内はすべて小島の注釈あるいは補足で
す。

「道徳は必ず（しも）人の教によるものにあらず、あたかも人の天賦に備わりて偶然に（特段の働
きかけなどなくても自然に）発起するものなりといえども、智慧はしからず、人学ばざれば智な
し。面壁9年能く道徳の蘊奥を究べしといえども、たとえ面壁9万年に及ぶも蒸気の発明はとても
期すべからざるなり。

世に教育なるものの必要なるは、すなわちこのゆえにて、人学ばざれば智なきがゆえに、学校
を建ててこれを教え、これを育するの趣向なり。」

福沢諭吉は今日の文明において智慧が必須であることを押さえた上で、学ばなければ智慧は獲
得できない、と述べています。そして「学ぶ」と「教える」は表裏一体のものとして捉えています。
さらに「教える」と「育てる」を対立的でなく、教えることによって智慧を育てる、と言っています。

福沢諭吉は、教育というものを、学校で（人に）智を教え、（人の中に）智を育てることと、
真っ当に捉えています。したがって、「教育」という用語は彼の意図を的確に表しています。

その上で

「されども一概に教育とのみは、その意味ははなはだ広くして解し難く、ために大なる誤解を生
ずることあり」

と続けています。繁多なる事物（千差万別、無限の事物）について

「到底この繁多なる事物を教えんとするもでき難きことなれば、果たして世に学校なるものは不
要なるやというに決して然らず。もとより直接に（この繁多なる）事物を教えんとするもでき難き
ことなれど、その事にあたり物に接して狼狽せず、よく事物の理を究めてこれに処するの能力を發
育することは、ずいぶん（大いに）でき得べきことにて、すなわち学校は人に物（繁多なる事
物）を（直接に、そのままに）教える所にあらず、ただその天資の發達を妨げずしてよくこれを發
育するための具なり。」

ここで福沢は「教育」をするかどうか、「教える」かどうかを問題にしているのではなく、「教
育」の二つのあり方：

「天資の發達を妨げる教育」と「よく事物の理を究めてこれに処するの能力を發育する教育」

を対比しています。後者は「智慧を発育する」とほぼ同義だと思います。「教える」ことで「これ（能力あるいは智慧）を発育する」が福沢の勧める教育であり、「そのための具」が学校でした。（「事物の理」は物理学の「物理」に、「究める」は物理学の旧名「窮（究）理学」に反映しています）。

（
福沢が「天資の発達を妨げる」教育として攻撃しているのは文字の読み書きを主眼とするもので、「活字引（いきじびき）と写字器械を製造するにとどまりて、世に無用の人物を増したるのみ」、もっと過激に
「いたずらに世に片輪者（かたわもの、片端者）の数を増すの恐れあり、はなはだ慎むべきことにこそ」とも書いている。その根拠として

「文字を教うるは、ただ人の記憶力によるものにて、・・・、他の推理の力、想像の働等はおのずから退縮せざるをえざるがゆえに、・・・」、
「他の能力はおのずから活気を失うて枯死せざるをえず」

などと言っている。もう一つは「女子教育」についてで、

「山村水落に女子英語学校ありて、・・・、我が輩は単にこれを評して狂気の沙汰とするの外なし。」
「嫁しては主夫の襤褸（ぼろ）を補綴（ほてい）する貧寒女子に英（語）の読本を教えて後世何の益あるべきや」

と差別的で、大丈夫か、と心配になります。

)

他動詞と自動詞

「育す、いくす」という他動詞（サ行変格活用の他動詞）を福沢は使っています。現代口語文では「育つ」が自動詞で「育てる」が他動詞ですが、「育す」は「育てる」に当たります。福沢の「これを発育する」も当然他動詞で、「（これを）育する、育てる」ことです。「能力を発育する」は福沢においては 外からの働きかけ を意味します。「天資」つまり生得の資質を土台としながらも、その上に「事物の理を窮めてこれに処するの能力」＝「智慧」を「発育する」＝「育てる」そしてこの 「育てる」を達成する手段が「教え導く」 ということになります。「教え導く」ために福沢は慶応義塾を建てました。

なお、広辞苑では「発育」について現代口語の「育つこと」だけが載っています。日本国語大辞典では「養い育てること」という明治期の他動詞の用法も載っています。「育成」という訳語もあります。また文語他動詞の「育す」は広辞苑には（当然）載っていませんが、日本国語大辞典には載っています。そこには

「子どもなど一人前になるまで世話をやき、教えみちびく」

という的確な訳語があります。福沢の「発育」は現代口語の発育ではありません。その確認が議論を進める前提です。

レトリックとしての「教育」対「発育」

冒頭の、話題になっている福沢の文章が次に現れます。

「教育の文字ははなはだ穏当ならず、よろしくこれを発育と称すべきなり。

かくの如く学校の本旨はいわゆる教育にあらずして、能力の発育にありとのことをもってこれが標準となし、省みて世間で行われる教育の有様を察するときは、よくこの標準に適して教育の本旨に違わざるもの幾何（いくばく）ありや。・・・」

最初の1行は一つのレトリックです。「教育の文字ははなはだ穏当ならず」の主張は次の行ではもう維持されていません。「いわゆる教育」（カッコ付き教育）と「能力・智慧の発育」を対比して、後者を教育の「標準」、教育の「本旨」とすべきだ、と言っているだけです。

目指す目標が「能力を発育する」ことであるとしても、「教えることでこれを育するの趣向なり」が福沢による教育の定義ですから、教育を発育と言ひ換えることはできないはずです。

「教育」という旗を、福沢の目指すものと全く対立する側に奪われ、新しい旗「発育」を掲げたい気持ちは理解できます。「教育」では「大いなる誤解を生ずることあり」と感じる状況もあったのでしょう。しかし、この論考「文明教育論」の中でさえ、結局彼は「教育」という旗を握った上でその「本旨」が何かを訴える道を選んでいるのです。「文明教育論」でやめた”教育”を1890年以後にまた使い始めた、ということでは全くありません。（対談の中で大田堯は「福沢は明治23年以後には、また「教育」という言葉を使っている」と言っているが、これはおかしい。）

Education の訳し方

小沢さんが「長々と紹介し」と言っている 太田堯・中村桂子の対談では、education を「教育と訳すのはちょっとおかしいと（福沢は）思っただけけれども・・・」と語られています。

太田は Oxford English Dictionary (OED) も引き合いに出して

「「引き出す」、これがエデュケーションの語源の一つ」

と言っています。

OED ではないが 電子辞書の (The New) Oxford Dictionary of English には
education the process of receiving or giving systematic instruction, especially at school or university

組織的（体系的）な指導・訓練を与え/受け取る過程、とりわけ、学校や大学で

educate give intellectual, moral, and social instruction to someone, typically at school or university

知的・道徳的・社会的な指導や訓練を人に与えること、典型的には学校や大学で

とあります。これが現代の“education”の語義です。訳語としてはやはり「教育」がふさわしいと思います。他動詞 educate はその定義として外からの働きかけです。もちろん receiving or giving とあるように与えることの裏には必ず受け取りがあります。

（これは単一のプロセスの二つの面です。or は同じ事柄について「言い方を変えると」、「見方を変えると」ほどの意味で使います。）

(N)ODE の定義は education の本質を捉えています。付け加えるならば、教える/教わる は人類だけがもつ能力で、それが人類の文化を築いたのです。

「一つの語源」が訳語選択の絶対的な基準になるはずはなく、現在の（その単語輸入時の）標準的用法の方が重要です。そのことをまず押さえた上で、語源を検討します。

他動詞 educate はラテン系の言葉ですが、e (=ex 外へ) + duc (lead 導く) + ate (接尾語, …ようにする), 全体として

外に導き出す (引き出す) ことを実現する

のような形をしています。他動詞 educe に接尾語 ate が付いた形です。

ゲルマン系の lead (導く) にあたるラテン由来の duce, あるいは duct は、接頭語 in (中へ), pro (前へ), re (後ろへ), de (離れて), intro (内側へ) などと結合して, induce, induction, produce, product, reduce, reduction, deduction, introduce, introduction など無数の単語を生成します。educe, educate もその仲間です。(名詞のダクトは電線などを通す管です)

“語源”の「引き出す」も、「教え導く」と対立するわけではありません。福沢は人間の「天資」(生得の innate な潜在能力)の土台の上に「智慧」を構築する 外からの 働きかけとして「教え」を位置付けています。しかし教えを受容して学ぶことは人間だけがもつ (他の動物にない) 生得の能力です。この学習能力 (天資) に依拠して (この学習能力を引き出して, うまく活用して) 「教え導く」は成立します。教育は「教え導く」ことであり, 同時に「教わって学べる潜在能力の引き出し」でもあるのです。

この「与え/受け取る」相互作用によって獲得された方の能力・智慧についてまで, これを「内部から引き出されたもの」と言ってしまうのは, 少しおかしいのです。

(

例を挙げる。人間は幼少の時期には, 周囲の言語を取り込み内部化し, 流暢に聴き話しができるようになる。その潜在能力を (幼少時には) 自然に備えている。日本で育てば日本語をアメリカで育てば英語を。この言語獲得能力は生得のもので, 進化の過程で人間の内部に備わり, それが発動するのだから, 「引き出された」ということもできる。しかし, 外から取り込んで再構成することで獲得した日本語なり英語の現在の使用能力を「内部から引き出した」とだけ言うのはおかしい。それは, (日本では日本語をアメリカでは英語を) 外から受け入れて内面化したものである。何かの能力を獲得できる能力と獲得されたその能力は, 同じ言葉でも別物である。人間は食品として蛋白質を摂取し, アミノ酸に分解した上で吸収し, 体の各部の蛋白質に作り変える。栄養処理能力は自身のものであり, 同時に, 蛋白質は外に由来する。「能力」という言葉は福沢においても未整理であるかも知れない。

大人に成長した後で, アメリカに渡っても, (自然に) ネーティブ並みに流暢に英語で話せるわけではない。言語獲得の潜在能力 (natural ability) は減衰している。

言語の「読み書き」はまた別である。読み書きという生物学的に2次的な文化的な課題については, 「自然に身につけていた」ということは少ない。教育を受けることが必要である (独学の場合も辞書に教わる)。

母語の「聴き話し」の場合, その機能が脳内に (進化の過程で) 潜在能力として備わっていて, それが環境の中で発現する。「読み書き」はそうではない。新しいこの文化について, 人類は進化的に対応できていない。「特定の「読み書き」用のユニットがあつてそれが自然に発現する」という事情はない。「一般知能」をやりくりして「読み書き」能力を実現している。さらに, 「読み書き」への意欲を子どもが自然に (生まれながらに) 持っているわけでもない。教育 (教え/教わるプロセス) がここで必要となる。

)

大田 堯（おおた たかし）・中村桂子の対談

太田堯は

「福沢諭吉などはさすがに「エデュケーション」を教育と訳すのはちよっておかしいと思っはいたけど」

と書いているが、前項ですでに説明したように、それは疑わしい。

むしろ、確かなのは、大田堯が「教育」は「エデュケーション」の誤訳であると思込んでいることです。（educate とのつながりを抛り所に）「英語の education に教えるという意味は含まれていない」と言っている。一方、日本語（漢語）の「教育」は「教＝教える」と「育＝育てる」の合成語ですが、教育に「教」の要素は薄くあるべき、薄くすべき、とする大田は「教育」という言葉を嫌っている。この二つが合流した。「育」についても「育つ」はよいが、「育てる」は悪い、と大田は思っている。「育成」という言葉を嫌っている。

「（福沢は）「発育」とすべきである、発育とした方がよろしいと、こう書いた」と大田は書いています。「能力を発育す」と福沢は他動詞的に使い、それは「能力を育成する」と同義で、現代口語の「発育」＝「育つ」の用法と全く違うのですが、大田はその面をあえて無視しています。

「そう、内部から出てくるような感じがしますよね」

はかなりズレた感想です。

（福沢の「発育」が他動詞的用法であることを「あえて無視する」というより、なにも気づかずに、気に入っているのかも。どちらでしょう。）

教育思想の総体において福沢諭吉と大田堯氏を比較することが本当は重要ですが、今はその場ではありません。私は福沢諭吉をよく知らないし、大田堯もよく知らない。

福沢が思う 教育の本旨 について大田はかなり批判的であるはず（？）なのに、ここで福沢という権威を、（曲解しながら）抛り所とし自説を補強する姿が、かなり奇妙に見えます。

だんだん議論が粗雑に不正確になっているようで、そろそろ止めますが、アメリカ占領期から1950年代にかけての遠山啓をどうしても思ってしまう。大田堯を先頭とする（？）大部分の教育学者が占領政策になびき、「進歩主義」、「子ども中心主義」の流れにのる「生活単元授業」を推進したとき、遠山は全くの少数派として、文化とりわけ学問を社会として継承し、次世代に引き継ぐことの重要性を主張し（彼には歴史感覚があった）、雑多でばらばらな「生活の中」でなく、組織だった学問の要素を教育に求めた（粗雑で不正確な議論をまだ私は続けている！）。福沢の「文明教育論」と戦後初期の遠山と、重なる部分がある、と私は（勝手に）感じます。福沢の「知恵」は遠山啓がある時期に強調した wisdom（人類の叡智）に対応する。

（おわり）

2018/10/07

小島 順